大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）大正三年二月一日發行第二卷第五號（大正三年一月三十日印刷納本）

近代思想

二月號

近代思想社
東京府下大久保百人町三五二


ニッポノホン
新音譜賣出し
弊社の賣出さんとする二月新音譜は其種類に於ては六種に過ぎずと雖ども義太夫、浪花節兩界に於て覇王と稱せらるゝ春子太夫、樂遊が得意の藝題を吹込みしもの江湖諸賢の趣向に投せんと信じて疑はざる所なり即ち左の如し
六五〜義太夫八陣(上)春子太夫 赤紙
六六〜同(下) 同 兩面
新式ニッケル(ラッパ)付蓄音器
廿二號廿二圓十七號十七圓
二三三七〜浪小山田庄左衛門(上下)東家樂遊 黒紙
二三三八〜花
五九〜義太夫廿四孝(上)春子太夫 赤紙
六〇〜同(下)同 兩面
蓄音器 一冊 壹圓 又付集
樂譜 一冊 十五錢
神奈川縣川崎町
株式會社 日本蓄音器商會
電話川崎四九番



第二巻第五號

ワイルドの哲學

個人主義は、吾々が社會主義を通じて到達せんとするものである。

近代の犯罪の親は、罪に非ずして飢餓である。

壓制は何人にも、壓制者自身にも有害である。壓制者と雖も、もつと善良な事の爲に作られたのだらうから。

理想國(ユートピア)を包括せざる世界地圖は、眺むるだにも足らざるものである。

革命の暴力は、社會をして一瞬間、偉大ならしめ、また高貴ならしめる。

取るより貰ふ方が安全である。然し貰ふより取る方が立派である。

法律を破るも立派な人があり、法律を守るも下らぬ奴がある。

——寒村譯——

大杉榮君に答ふ

相馬御風

大杉榮君

僕は君が一月の『近代思想』で僕に宛てゝ書いた公開狀を非常に嬉しく讀んだ。何よりも先づその文には君自身の本當の熱誠が僕に感じられたからである。手に汗を握つて話しかけて居るやうな君の心持が感じられたからである。僕はまだ君と相知ること極めて淺い。君自身の生活が眞にどんなものだかと云ふ事についての僕の知識は甚だ貧弱である。けれども君が今日まで社會的に實行して來た行動について、又君が絶えず發表して居る君の思想的表白について、僕は半面甚だ不滿な點があると共に、他の半面に於て最も熱誠ある新生活の奮闘者として、又新運命の開拓者として僕は君に對して常に多大の敬意と同情とを持つて居る。僕が今茲に君の公開狀に對する返答を書かうとするのも、要するに敬意と同情と更に不滿との表白を敢てしやうとするに外ならない。

大杉君

君は僕が小川未明君の『廢墟』を批評した文中、『根本的な個人革命と同時に吾々は更に現代のあやまりつくられたる社會組織に向つての根本的な革新を要求する』と述べたのに對して君は僕がこれに氣のついて來たのは甚だ喜ばしい事だと云つてくれた。けれどもこれは何も僕が今更氣のついた事ではなく、隨て君が喜んでくれる程僕にとつては嬉しい事ではないのだ。何故なればこんな事はあたりまへの事だからである。『個人革命と同時に社會革命が現代に於ては必要な事である』——實際そんな事は少し眞面目に考へて居る者なら誰でも氣のついて居る事なのだ。僕が今更こんな事を云つたと云つて喜んでくれる君は、一方から云へばあまり人を馬鹿にしたとも云へやうではないか。

だが、こんな事を云つたからとて僕は君に對して喧嘩を吹つかけやうと云ふ心など は少しもない。『まあ早い話がそんなものぢやないか』と云ふ位のものである。要するに吾々の問題はそんな抽象的な境地に止まつて居てはならぬ事を考へるか

らに外ならない。個人革命の必要、社會革命の必要――問題はそんなところにはない。寧ろもつと〳〵手近なところにあるのだ。即ち如何なる點が今の人間に對し、社會に對して不滿足なのか。如何なる事を吾々は本當に望んで居るのか。それを具体的に表白し、實行する――それが一番大事な事なのだ。

生活革命の必要――そこまでは君等と僕等とは一致する。問題はそれからだ。ところで先づ君等について見ると、君等は主として今日の吾々の生活の虚僞と不幸との因て來る原因を客觀的に尋ね求めて、今日の社會組織そのものゝ誤謬と云ふ一點に突き留めて、それに向つての突撃を以て君等自身の最も大なる仕事だと信じて居る。成程君が『生の創造』のうちに書いて居る通りに、吾々が今眞に要求して居るところの生活が、『必然から自由への飛躍的生活』であり、『外的强迫から內的發意への創造的生活』である事は、僕等も同じく考へて居る。けれどもそれだからと云つて僕等は君等のやうに直に現存社會制度破壞の爲めの『團結』と『叛逆』とが、最初の而して最後の手段だと云ふ結論には到達しない、そこが君等と僕等とちがふところだ。

君は云ふ。『經濟的行程が道德を創ると云ふ事を餘りに大まかに主張した社會主義の哲學の前には豫め各個人の道德的性質を說くが如きは、素より無駄事であつたのだらう。しかし社會主義が躓いたのは結局此の石であつた』と。いかにも卓拔な見解である。然るに玆まで自覺して來た君が、矢張何よりも先づ現存社會に對する團體的叛逆運動を主張して居る。それが僕等には充分にまだ合點の行かぬところなのだ。

君は僕が現在の社會組織のあやまれる一點を指摘して、『物質の力を人間性の力以上に置かうとしてゐる』にあると云ひ、更にその原因に言及して、『近代に於ける物質文明の急遽なる進歩が主なる原因であるか、或は人間の物質的慾望の過度な增大と云ふ事が第一の原因であるか、その何れにしても……』と述べたのに對して、『其の原因の如きはもつと遡つて、もつと具體的に觀ねば駄目である』と敎へてくれた。君の考へではもつと遡つてもつと具體的に觀れば、それは矢張近代社會の經

濟組織たる資本家制度や傳習的國家組織にあるとでも云ふのだらう。僕等と雖決して君の見解に對して殊更楯をつくる必要も見出さない。けれども僕等をして眞によく凡ての吾々の生活の不滿の原因を探らしめるとすれば、矢强僕等はそれを僕等自身の生活そのものに求めるより外に道がないのだ。即ち罪は外存の社會制度にあると同時に、僕等自身に寧ろより多くあるのだ。僕等は顧みて奴隷的生活に慣れて居た僕等の自身の罪が何よりも忌はしいのだ。永い間の敎育と習慣とに慣らされた僕等自身の或るものが何よりも〳〵忌はしいのだ。僕等を苦しめるものは、外にあると同時に僕等の內にある。僕等が自我の創造を主張し、生の要求を肯定するに努めつゝあるのは、要するに內なる誤まれる僕を破つて、本當の僕を表現しやうとするのだ。

さうだ。本當の僕自身の表現――それが何よりも〳〵僕には緊要な問題だ。そしてこゝに現代藝術の最も大なる使命がある。自我の生命を能ふかぎり燃燒せしめる爲めの行進曲として僕等が新らしい藝術を求めるのは其の爲めだ。此の點で僕は君等の云ふ如く誰も彼も團結を申し合せて叛逆運動に向ふやうになる事は、望ましくない。各自勝手な事をして居て、それがおのづから合した運動となる事こそ僕等の最も痛切に要求する社會革命なのだ。その點で君等も矢張もつと〳〵藝術のお蔭を蒙るやうに望む必要があらうと思ふ。創造的生活――自由な生活と云ふやうな事をいくら望んで居たとて、その人の生活が何物も創造しなかつたら何にもならない。君等は創造的生活を得る必要は非常に痛切に感じて居るのだらうが、創造的生活そのものを味はうとする方に少しおろそかではないか。生活の形式を新たにする事に急で、生活內容を豊富にする方に少しおろそかではないか。自我創造の分野を開かうとするに急で、自我創造――即ち生活內容の表白の方に少しおろそかではないか。藝術家的生活に對する君等のアンチパシイを往々にして見るのは、多く原因はそこにあるやうに思ふのだ。

大杉君

僕はあまり君等の缺點に對して誇大的に云ひ過ぎた嫌ひがある。だが、それにも拘らず君が僕に

向つて發してくれた『僕が君の中に見出した友人は本當に僕の友人なのだらうか』と云ふ問に對しては、僕は喜んでイエスを以て答へたい。何となれば眞實に自我の生活を將來に切り拓いて行かうとする熱誠に燃えて居る點に於て君も僕も同感し合ふ事が出來るからである。『生の創造』に於て君の說いた事は、僕もその根本に於て同意が出來るからである。

たゞ君と僕のちがふところは、態度のちがひである。僕は自我を目覺しめ、燃燒せしめて外に向はしめんとする。君は個人を自由にせんが爲めに、外を革めやうとする。僕は孤獨の力を以て社會に衝らうとする。君は孤獨の力を集めてある一つの目的を遂行しやうとする。僕は豫め何の客觀的窮極をも認めざる自我そのものゝ大膽にして自由なる表現を以て生活しやうとする。君は豫め客觀的の進路を定めて、旗皷堂々と進まうとする。僕も戰ふ。君も戰ふ。けれども僕は豫め敵を認めない。君は豫め敵を認めて居る。

大杉君

要するにお互に正直に生きやうではないか。そして各自勝手に生きやうではないか。又各自に勝手な生き方をゆるし合はうではないか。理屈で言葉の遣り取りをしないで事實に於てお互を觀合はうではないか。僕は君が最近の思想界に起つて來た要求本位の主張が、いつまでも具体的な問題にぶつからないで抽象の天地に彷徨して居るのを責め、その逃避的傾向を難じて居るのは、大に〳〵同感である。けれどもその具体的に成る、成り方を始めから斯うあれ、彼樣なれと求めるのは止さうぢやないか。要するに何うでもよいのだ。たゞ眞に自由な自我の生活を切り拓いて行かうとする勇敢な努力でさへあれば。（一月二十三日）

（云ひたい事の十分一も云へない。改めて詳しく書きたいと思ふからそのつもりで居てくれたまへ）

境遇と思想

安成貞雄

一

十二月の白樺の、阿部次郎氏の『小泉君に』と小泉鐵氏の『阿部次郎君に答ふ』とは、一箇の興味ある問題を提出した。

阿部氏の文章は、小泉氏が十一月の白樺に於いて、阿部氏の『年少諸友の前に』下した批評に對する反駁である。小泉氏の文章は、反駁の反駁である。而して阿部氏は、小泉氏に絶交を宣言し、小泉氏は、それを承諾した。

絶交は、通り一遍の知合の間に起るものではない。阿部小泉二氏の文章に徵すれば、其交情は、『絶交』に値ひする程度のものである。二氏は何故に絶交したか。

阿部氏は自ら信ずる所あり、『唯自分の中に自分自身に對する評價を貯へて之に信頼する』人である。氏を『多少なりとも知つて居る友達は』、氏の思想、人間に『何等かの價値と眞實とを認め』、『何等かの意味に於いて』氏を『尊敬』する。氏は『相互の尊敬』を以つて、友情の『本質的な連鎖』とする。然るに小泉氏は、十一月號の白樺に於いて、阿部氏の『ことが話題にのぼると熱心に』阿部氏の『文章の淺薄であることを主張する』と云ひ、『性格の輕薄と云ふことが、却つて』阿部氏に『災しなければ好いがといふことを』感じたと云つた。『輕薄と云ふこと』を『思想全部の否定』と考へ『輕薄と云ふこと』を『人格全部の否定』と考へる阿部氏は、そこで、『當分の間友達つきあひは出來ないことになつた』と考へた。

絶交の理由は是れで明白である。阿部氏ならざるも、絶交を宣言しなければならぬ所である。

然らば、何故に小泉氏は阿部氏の文章の淺薄であることを主張したか。如何なる理由に憑つて、性格の輕薄と云ふことが、阿部に災しなければ好いがと感じたか？十一月の白樺に於いて、小泉氏は其の理由を説明して居ない。阿部氏は、小泉氏の批評の反駁に於いて、小泉氏が、阿部氏の態度に對して勝手な邪推を加へ、此態度に對する邪推を基礎として、阿部氏の文章の眞理内容に對する曲

解を築き上げたものとした。そして阿部氏は、『年少の諸友の前に』を書いた時、其の對象としたのは、『潮流』であつて『個人』ではなく、『此の如き潮流は正しきや否や』を問題としたが、『某々の個人は此の潮流に屬するや否や』は問題としなかつた。阿部氏は、明かな意識を以つて潮流と個人と、個人の迷ひと本質と、個人の現在と未來とを區別した。或個人を強いて模倣渦中の人だと斷定したことはない。或個人の全体と未來とを否定したことはない。いのちの若芽を憎み、他人の生命を足蹴にしたことはない。阿部氏は、或潮流を否定しても、猶その中に漂ふ個人の全体を愛惜し、その未來を愛惜する。否寧ろその中に漂ふ個人の全体と未來とを愛惜すればこそ、之を漂はし去る潮流に挑戰するのである。『然るに、』阿部氏は云ふ『君は自分勝手に「その潮流の中には自分（又は自分の友達）をも含めて居るのだらう」と云ふ、眞理內容を主とする者にとつては、耻づ可き問題を提出しました。さうして僕の攻擊するのは、君（又は君の友達）だと邪推しました。而も僕は（君又は君の友達）の全体と未來とを否定するものだと邪推しました。最後には（君又は君の友達）の若い生命を憎み、之を足蹴にかけるものだとまで氣を廻しました。』併し、其の攻擊した潮流が、小泉氏の周圍の人達の多く用ゐる言葉によつて構成さるゝことを認めた阿部氏は、小泉氏の『周圍の人達に一應自分のことを云はれたやうな不安を感じさせることは豫期して』居つたが、『苟もその人が自分の思想と生活とに對する落付いた自信と內省とを持つて居る限り、之は俺のことではないと、直ちに安心することが出來る』と思つて居つた。『然るに』阿部氏は怪しむ『君は僕の云ふことが當つてゐないと思ひながら、而も一種の不安を感じてゐるらしいのは何故でせう。』

小泉氏は之れに答へて、邪推、曲解と云ふ批難はノンセンスであると云ひ、『「年少の諸友の前に」を讀んで唯の一度も僕自身が云はれてるのだななど、思つたこと』がなく、『唯の一度も僕は不安を感じさせられたことは』なく、「年少の諸友の前」にを讀んで『腹を立てた原因を個人的感情に置かうとするのは』、見當違ひであると云つて居る。そして小泉氏が、阿部氏を輕蔑

したのは、『相互的な、報復的な、みじめな感情からではありません。僕は君自身の態度を惡くんだ。』『あのやうな態度に出る君を惡くんだ』のである。『何故あの樣な態度に出るのが惡いかと云ふ議論になれば』、小泉氏は『それこそ人格の味と云ふものに歸するかと思ふ。』而して小泉氏は、『今の他人を導いて行くと云ふやうな顏をする批評家とか、他人の足許ばかり氣になる先輩を輕蔑し、』『善良なる自己輕蔑者を輕蔑して』居る。自分は偉くない、強くない、だが外の人よりは一歩は先きに居るといふやうな、『善良な自己輕蔑者特有の顏付をして、他人の歩るき振りを氣にしたり、お切介な態度に出る』人達に『腹を立ち不服を抱いて』來た。小泉氏は阿部氏が『丁度それだ』と考へた。小泉氏は、阿部氏が『ある個人を對稱としやうと、潮流を對稱としやうと、』『あのやうな眞理內容を築き上げて宣言するその人格的背景に不服』である。而して、小泉氏は、『今後も君が潮流に挑戰してる間に、僕は自分のことを考へたく思ひます。今僕が自分のことを考へて居る間に、君は「年少の諸友の前に」をかきました。僕は僕の一番輕蔑して居る態度を自分の前に突き付けられました』と云つて居る。

小泉氏が阿部氏を輕蔑した理由は、是れで略々明白である。即ち、阿部氏が小泉氏の一番輕蔑する自己侮蔑者特有の顏付をして、他人の歩るき振りを氣にしたり、お切介な態度に出たが爲めに、小泉氏は阿部氏を輕蔑したと云ふのである。是れで、二氏の間の當面の擊爭は解決されたわけである。

併しながら、阿部氏が『自分は偉くない、強くない、だが外の人よりは一歩は先きに居るといふやうな、善良なる自已侮蔑者特有な顏附をして、他人の歩るき振りを氣にしたり、お切介な態度』に出たのは何故であるか？何が阿部氏をしてかゝる態度に出でしめたか？その理由は偶然であるか、必然であるか？若し偶然であるとすれば、その態度を輕蔑した小泉氏をしてその偶然に際會せしめた時、小泉氏が、其の一番輕蔑する態度に出でざるを得るかどうか？阿部氏が『潮流に挑戰してる間に』、小泉氏をして『自分のことを考へ』させると云ふ相違を齎らしたものは何か？若しそのものが

小泉氏に影響すれば、小泉氏は『潮流に挑戰』せざることを得るかどうか？若しそのものが阿部氏に影響すれば、阿部氏も『自分のことを考へ』るかどうか？興味ある問題は是れである。

二

以上の問題に對する答へを、小泉氏の反駁中に求めるのは、無理であるが、併し、その手掛りと見るべきものがなくはない。小泉氏が、『何故あのやうな態度に出るのが惡いかと云ふ議論になれば、それこそ人格の味といふものに歸すると僕は思ひますから何も申上げません。』と云つたのはそれである。是れは、論理的明確を缺く言ひ方であるが、其意味は、人格の味が即ち態度であつて、人格の味の善惡は、態度の善惡であると云ふことであらう。是れで一應問題は解決せられた樣であるが、併し、實は問題が堂々めぐりをしたに過ぎない。人格が發達し、變化するものである以上、人格の味も是れと照應的な變化を受けるものと解せられなければならぬから、人格の味即ち態度を決定する要素、影響若しくは力が何んであるかは依然として不明である。

此の人格の味、即ち態度を決定するもの、態度に出でしむるものは、然らば何んであるか？阿部氏と小泉氏とに態度を異にせしめたものは何んであるか？

眞先きに其れ自らが現はるゝらしい解案は、年齡の差異である。阿部氏が或る人々より年長であると云ふ事實の生ずる自覺が、阿部氏をして『年少の諸友の前に』を書かしめた樣に思はれる。併しながら、阿部氏と同年輩の人々が必ずしも阿部氏と同一の態度を採らず、また小泉氏と同年輩の人々が必ずしも同一の態度を採らず、小泉氏と同年輩の人々のなかに、阿部氏の態度を讃する人があると云ふ事實は、年齡說を打破るに足るものである。且つ年齡說を承認すれば、小泉氏が阿部氏の年齡に達した時、今日の阿部氏の態度に出ると云ふ假定をも承認しなければならぬ。

交友の影響も亦考慮の中に入つて來る。併しながら、阿部氏の交友が阿部氏と同じく、潮流に挑戰しないのを見れば、少なくとも阿部氏の側に於ける交友の影響は取り立てゝ云ふべき價値がない。小泉氏の側に在つては、交友の影響を、小泉

氏も拒まないに相違ないが、これを認むると共に、其の交友をして『自分のことを考へる』人たらしめたものは何かと云ふ問題が出て來なければならぬ。

三

此の問題は、自然に、小泉氏の周圍の人々に注意を向けしめる。

白樺の人々に共通する要素は何んであるか？それは、此の人々が、原稿料で衣食する心配がないと云ふことである。是等の人々は、或は其の世襲財産によつて、或は公債、株劵の利子、地代、貸家の收入によつて自ら生活し、若しくは生活する父母を有して居る。問題の小泉氏に就いて云へば、調査の範圍内の知識によるに、少なくとも原稿料生活を營んで居る人ではない。原稿料によつて家賃、米代、瓦斯電燈代を支拂うて居る人ではない。原稿の賣口を心配しなければならぬ人ではない。小泉氏と阿部氏との著しき相違は、此の點にある。

阿部氏は、自ら働いて衣食する人である。其原稿料は、其の日常生活に直接の關係を有する人である。原稿料の賣口に全然無關心であり得ない人である。無關心であり得度いかも知れないが、境遇がこれを許さない人である。

而して、其の原稿料は、誰れが拂ふのであるか？これは、社會が拂ふのである。社會は、其時代に於いて、一番廣く社會に迎へらるゝものに、一番高い原稿料を拂ふ。一番廣く迎へらるゝものが、思想の主潮である。主潮が一番高い原稿料を得る。之れを原稿料を得るものから云へば、主潮に居ることに依つて、一番高い原稿料を得られる。同じ勞力で、報酬が異なるものとすれば、何人も主潮に居らんとするのは、當然の事である。社會から原稿料の形に於いて、衣食の資の一部を得て居る者は、社會に於ける文學の潮流に對して、決して無關心であり得ない。明白な意識はないにしても、或は、意識では、是れを拒むにしても、副意識的に、適應本能的に、少なくとも、最少の勞力に對して、最大の報酬を與ふる潮流は何んぞやと云ふことを見て居る。其の間に、從來の境遇、教育等によつて築き上げられたる趣味、藝術的良心は、此のヴイタル・ネセシチーの爲めに、或は變形を受ける。其の度合は、趣味、藝術的良心と、必須と

必要との杆格の度合に照應する。斯くして原稿料生活を營むものは、其時代の主潮に入る。

一旦主潮に入れば、主潮以外の潮流に居るものを見る毎に、一の不安を覺える。生存の不安と云ふべき此の不安は、自分が主潮に入れる經過中に、自分の事として經驗するのであるが、一旦自分が主潮中に居れば、主潮以外の人々に對して感ずるに至る。主潮以外の人が、自分の友人である場合には、其の不安は一層甚だしい。此の不安の感は、その表現を迫る。此の不安の感が、漠然と一般的に表白せらるゝ時は、普遍な潮流の批評となり、特定の個人若しくは群に向つて發表せらるゝ時は、他人を指導し、誘掖する形となる。此の心理的經過は、獨身の落付かぬ生活から、結婚の安定生活に入つたものが、一般的には結婚生活の樂しさを說き、特定的には、結婚を勸奬するのと同じことである。

阿部氏にあつても、若干の小差を以つて、之れを適用せらるゝに相違ない。阿部氏が、其の不安の感を特定の人々に向つて發表したものが、即ち『年少の諸友の前に』である。斯う見て來れば、阿部氏が、『年少の諸友の前に』を書いたのは、其境遇に應じて採つた態度として、極めて自然である。若し、自己の境遇に應ずることが、惡くないとすれば、阿部氏の態度は惡くはない。たゞ、阿部氏が、自己に不安を與へた人々の境遇を自己と同一視した所に、若干の缺陷を見る。

斯くの如く、潮流に挑戰すると云ふことは、阿部氏にとつては、自然なことであるが、併し、阿部氏も云ひ、小泉氏も云ふ如く、年少の諸友が特に小泉氏を指さないにしても、小泉氏が、阿部氏の態度を『馬鹿々々しく思ふ』のは當然である。

小泉氏は、原稿料を與ふるものとしての社會とは、何等の交涉を有しない人である。社會が一番高い原稿料を拂ふ潮流が何んであるかと云ふことに無關心で居つても差問がない人である。換言すれば、社會が原稿料を拂ふか、拂はないかと云ふことは、念頭に置くことなしに、自分の好きなことを書き、好きなものを讀んで居られる人である。氏が衣食の資たる公債、預金の利子は、氏が思想の主潮に居ると居らざるとを問はず、必ずはいつて來る。氏は生存の不安を知らない人である。寄

生生活を營んで居る人である。斯くして自分のことを考へて居ることの出來る小泉氏は、意識的か若しくは無意識的な自己承認によつて、自分は正しい道を行くと信じて居る。氏にとつては、潮流を氣にする者の心理が、其個人の生存の條件であることがわからない。たゞ、一の馬鹿々々しさと映ずる。その馬鹿々々しさが、氏の前に『他人を導いて行くといふやうな顏』をして現はれて來れば、腹を立てるのは當然である。併し、小泉氏が、若し潮流を氣にする人の心理を明確に理解して居れば、それを馬鹿々々しく感じなかつたに相違ない。

四

斯くの如くにして、阿部、小泉二氏の境遇は、各々の異なる態度を生んだ。而して二氏は、此の事實に氣が付かなかつた。併しながら、二氏を絶交に導いたのは、更に他に心理上の理由がある。

阿部氏に、一番不安の感を與へたのは、氏の友人にして、而も直反對の境遇に居る小泉氏であつたに相違ない。主潮に居る阿部氏の主潮以外のものに對する不安の感をして、表現を迫らしめ、それに『年少の諸友の前に』と云ふ特定の名稱を與へしめたものは、恐らく、阿部氏の所謂『月蝕皆既の晩に』二氏が相語つた話の中にあるであらう。阿部氏が『年少の諸友の前に』を書くに至つた動機の最も力あるものは、小泉氏の態度であつた。少なくとも、小泉氏の態度が、阿部氏をして、『此の如き潮流は正しきや否や』と考へさせた。而して、阿部氏は、其議論に、客觀的一般性を帶ばしむる爲めに力めてその個人的分子を塗り潰した。併し、當の相手たる小泉氏には、それが極めて明瞭に感ぜられた。小泉氏は辭を極めて、自分自身が云はれて居ると思つたことはないと云つて居るにかゝはらず、十一月の白樺に現はれた批評には、打ち消し難い個人的感情が現はれて居る。境遇の差異は、漠たる階級的敵意を抱かしむるが、個人の絶交に導くには餘りに力が弱い。小泉氏が、個人的感情を交へないと主張するのは、阿部氏と同じく、客觀的一般性を帶ばしめんとするに外ならない。

而して、小泉氏が『他人の足許ばかりが氣になる先輩』に對して、馬鹿々々しい感じを抱き、『他人の歩るき振りを氣にしたり、お切介な態度に出

る人』に腹を立て、不服を抱いて來たと云ふことは、氏も亦、必ずしも、他人の歩るき振りに無關心であり得ないことを證するものである。阿部氏が他人の歩るき振りを氣にしたのは、其の境遇上必然であるが、併し、境遇其物は必然でない。若し小泉氏をして、地を換へて、自活生活に居らしめたならば、其一番輕蔑する態度に出ざるを得るべきか否かは疑問である。阿部氏をして寄生生活に居らしむれば、小泉氏が『潮流と挑戰する間に』、『自分のことを考へ』得るに相違ない。

『潮流に挑戰する』のも、『自分のことを考へるのも』、境遇がさせることである。第一の問題は、同じく『自分』であるが、自活生活は、人をして『先づ』潮流に挑戰せしめ、寄生生活は、『先づ』自分を考へしむるのである。自分を考へることが、直接で、端的であつて、潮流に挑戰することが、間接で、生温のではない。

『先づ』潮流と戰ふ阿部氏は、『僕はある潮流を否定しても、猶其の中に漂ふ個人の全体を愛惜します。その未來を愛惜します。否寧ろその中に漂ふ個人の未來を愛惜すればこそ之を漂はしむる潮流に挑戰するのです。』と云つた。こゝに、個人の不安に根ざす博愛主義の萌芽がある。『先づ』自分を考へる小泉氏は、一月の白樺で愛せんとする意志を說いた。こゝに個人の擴充に根ざす博愛主義の萌芽がある。博愛主義も、境遇改革の運動も、其根を個人に置く。決して生温いものでも、間接なものでもない。

■尾竹紅吉から■

私達の雜誌はいよ〳〵三月一日に東雲堂から創刊號を出すことになりました。
名前は、番紅花(サフラン)といひます
同人は、松井須磨子、原信子、小笠原貞子、小林哥津、神近市、それに私で御座ひます。
劇と歌劇と、それに音樂、美術、創作詩歌とこれだけのことをいたします。

胡麻鹽頭

貝塚澁六

■前號の荒畑君の『冬』と題する一文は、大分感慨の深い文字であつた。然し只一つT君が議會政策を主張したからと云つて、直ちにそれを『代議士になつて、二千圓の歳費にありつきたいのかナ』と嘲罵したのは、あんまり淺い感情の露出のように思はれる。僕は荒畑君の爲に之を惜む。

■平塚明子君から賣文社に宛てゝ『こんど奥村博氏と至つて簡易な共同生活をいたすことになりました』といふ通知が來た。兎にかくこんな通知狀が平氣で出せるようになつたのは、近來に於ける人心變遷の著しい證據である。嶋村抱月君と松井須磨子君との關係の如きも、あの位の物議で濟んで居るのは、隨分面白い事である。

■七年ばかり以前、我々の交際間で、或若き婦人が夫といふものなくして子を産んだ。或人々は大いに其の不道德を責めた。然し其の婦人は遂に其の相手方の男を明言せず、別に自巳の不道德の謝罪もせず、平氣な顏して獨で其子を育てゝ居た。人が誰の子だと問へば、私の子だと答へて居た。それが爲め其の婦人は、多少交際社會を狹くしたけれども、別に人非人として社會外に放逐もせられなかつた。是も實に面白い現象だと僕は思つて居た。平塚君の場合とは大分事柄が違ふけれども、斯ういふ問題に對する世間の神經が段々鈍くなつて行く例證としてツイ思ひだしたから記して置く

■德富蘇峰君の『時務一家言』を讀んで見た。此書の內容は、蘇峰君が桂公に依つて實行せんとした社會主義だそうな。國家社會主義とも云はず、皇室社會主義とも云はず、態と單に社會主義と云つた所に種々の面白味が存じて居るように思ふ。『社會』といふ二字だけが發賣禁止の原因になつた事のある時代に比べると、二三年の事でエライ變調を來したものだ。

■同書の卷頭に『著者の述懷』と題する一文がある。是は蘇峰君が『變節漢』と稱せられしに對する辨解で、要點は『予は意見によりて立場を變じたる事はあるも、立場によりて意見を變じたる事なし』といふのである。即ち意見の變じた結果として立場が變じたのだと謂ふのである。然し其の意見の變じたのは何の事の結果であらうか。矢張り立場の變つた結果ではないか。こんな辨解は全然無意義である。僕は此事について山路愛山君の『獨立評論』二月號に稍長い一文を寄せて置いた。序でのある方は御一讀を願ふ。

■大杉君の『生の創造』に就いて少し委しい批評をして見たいとも思つたが、此の欄內では迚も十分に書き切れないし、さりとて今の處、別に大いに書くほどの氣にもなれない。只大杉君の英雄的の態度と神秘的の思想とが、餘り高熱に達せざらんことを希望して置く。大杉君は、社會主義者が『自覺が社會生活を創るのではない、社會生活が自覺を創るのであるといふ事を誇張する』と云ふが、大杉君自身は又、自由、創造、發意、自我、權力意志などいふ事を隨分誇張して居るように見える。

■それは兎にかく大杉君の病氣が全快して大いに本誌の編輯に力を入れる事の出來るようになつたのは、何より嬉しい。本誌發行後一年あまりの中に、大杉、荒畑の二君が今の思想界なり文壇なりに重きをなすに至つたのは、實に著しい事跡である。今年は更に二君の大成を切望せざるを得ぬ。

■それから今一つ、近來著しく僕の眼に映じたものは、安成貞雄君の評論文である。

安成君の能文見識は固より久しく僕の感服する所であつたが、實は失禮ながら、近來の論文に現はれたほど、爾く組織的な、徹底した意見が出來て居ようとは思はなかつた。安成君の評論は、荒畑君のに比して一層精緻であり、大杉君のに比して一層文學專門的である。そこで文壇に於いて我黨の立場を代表する人としては、どうしても安成君が一番適當と云はればならぬ。

■そこで此の三君が、此際相砥勵して大いに勉強する事とし、荒畑君は小說創作の方面に於て、大杉君は社會學、哲學の方面に於いて、安成君は文學評論方面に於いて、各十分に其の技倆を發揮し、其の蘊蓄を傾瀉するならば、今年の文界は必ずや『近代思想』の旗風の下に靡き伏すであらうと思ふ。

■又しても前號の評をするが、伊庭君の馬泥坊の道德觀について僕は少し異論がある。尤も、僕はショウの馬泥坊を書いた趣意が十分明白に分つて居るとは云はぬが、只伊庭君の云ふやうな趣意ではあるまいと思ふ。

■伊庭君は、ショウが道德的情慾の存在を迷惑に思つて、それに對して絕望的な罵倒を試みたものが馬泥坊だと云つて居る。然し僕から見れば、それは伊庭君自身のような近代人の考へ方に過ぎぬと思ふ。

■ショウは道德感情を以て一個の情慾と目した。食色の慾と同じような一個の本能と目した。世間普通の倫理學では、道德は情慾に對立するものである。情慾は本能であるが、道德はそれを導く理性であると云ふ。そこで世間に善惡といふ觀念がある。然るに斯樣な間違つた善惡の立て方をするからして、善は即ち僞善となり、人は皆惡となる。そこで僞善を屑しとせずして、大膽に本能に從はんとする者は、自ら惡人を以て許す事になる。此劇の主人公ポスネットは即ちそれである。所が、其の惡人には善を爲すといふ理性は無いけれども、矢張り道德的情慾といふ本能があつて、折々それが發作する。それで惡人が遂に最も愛すべき人物となり、僞善の善人が一向つまらないものになる。

■要するに、ショウは本能論者である。本能に從ひ、本能を達することを目的として居る。食色等の本能に於いても、道德の本能に於ても、同じく其の本能に從はんとするのである。そこで世の謂ゆる善惡といふものは無くなつて了つて、只數種の本能の矛盾が生ずる。食色の本能が勝つ事もあれば、道德の本能が勝つ事もある。道德の本能の勝つ塲合に、人生の甚だ面白い現象が生ずる。若し人が諸種の本能を十分よく理解して、之を並び遂げしめる事が出來たらそれこそ一番愉快な人生であらう。(イヤ、こんな事を云つて居る中に、何時かもうショウの考ではなくて、僕自身の考になつて居るかも知れぬが。)兎にかく、ショウには伊庭君の云ふ樣な、道德的性慾を迷惑がるとか、それに對して絕望的な罵倒をするとかいふ近代的な所は決して無いように思ふ。

■序でに云ふが、細田枯萍氏の『人と超人』に、moral passion が『道德的熱情』と譯されてある。普通の倫理思想からして、道德を情慾と稱するに忍びずして、熱情としたものかと察せられる。然しそれではショウの倫理說が隱れて了ふ。從つて其邊の對話の意味が不徹底なものになつて居る。

カーライル曰く、英雄とは眞率なる人の謂なりとせば、誰れか英雄たり得ざるの故あらんやと。淼六君の一考を乞ふ。

——榮——

僕自身

寒村

■前號の『冬』の中の、T——に關する僕の言葉が、澁六氏に依て問題とされたから、一言お答へをして置く。澁六氏は『T——も代議士になつて、二千圓の歲費にあり付きたいのかナ』と云つた僕の語を、『淺い感情の露出』と稱せられたが、成る程、あれは確かに淺い感情の露出に違ひない。只だ、何故に謂ふ所の『淺い感情の露出』が、爾く僕の爲めに『惜しむべき』ことなのであらう乎。非常な聖人や英雄に非ざる限り、—聖人や英雄だつてそうだらうが—始終深遠な思想や、高邁な感情のみを有して居るものは、先づ無いと云つて差支へあるまい。僕の如きは、自分の品性の下劣、感情の淺汚を顧みる時、羞ぢたり悲しんだりするのは通り越して、自分の情け無くなる事がしよつ中だ。然し、それだからと云つて、僕は何故に何時も高邁な感情のみを有して居なければならぬのである乎。何故に或る塲合に際し、或る人に對して、『淺い感情』を有の儘に『露出』する事が出來ぬのである乎。淺い感情 凡俗な考へ それが吾々凡人日常の、悼ましい實際生活なのであり、眞實の人生であつたならば!。

■假へば彼の塲合、僕が非常に高潔な人格を有せる人間であり、優雅な感情を抱ける人間であつて、あんな野卑な皮肉を云はず『淺い感情を露出』せず、もつと何か立派な事を云つたら、それは確かに善良な事に違ひなかつたらう。然し乍ら、不幸にして僕は彼處へ現はれたゞけの、極めて下劣淺薄な人間に過ぎないのである。そしてあゝ書いた通り、心でも亦あゝ思つたのである。あゝ云ふ事は書かなければ善かつたかも知れないが、然し、心で思ふのと筆で書くのとどれだけの相違があるのであらう。僕は思つた事を有の儘に書いた。書く書かぬに拘はらず、思つたのは僕にとつて書いたのと、眞實なのに變りは無い。そして、僕は彼の塲合、僞はらざる僕自身を描かんと欲したのであつた。

■僕が僕自身を描くに際して、如何に醜悪下劣な色彩を用ひやうと、事件が僕自身に限られて居たら、恐らく澁六氏はそれを僕の爲に惜みはしなかつたらうと思ふ。只だ彼の中に、T——に關する一句があつた爲に、初めて問題となつたのである。然し、それ迚も僕が何故に、T——をあゝ云つて許する事が悪いのであるか。實際の人間が、世間の人間が、社會主義者諸君が、或はその交る人間の陰口をきゝ、或はその主義見解を異にせる人間の悪口を云つて、敢て怪しまないのに。僕の言葉が『淺い感情の露出』か否かは、それは讀む人が好きに取るが善い。然し、僕の書いた事は、社會主義者諸君が常に行つて居る事と、何の異なる處も無いと僕は思つて居る。但だ、彼の文句に對する一切の責任を負ふ事は、僕の決して厭はぬ處であつて、小説などと稱する名稱の殻へ隱れて、責任を逃避するものでは無い。

■澁六氏は僕の最も敬愛する人の一人である。淺い感情の露出を惜むと云はれた語の意味が、もつと品性を高潔にしろ、皮肉や嘲笑的態度をとらず、云ふべきがあつたら堂々たる意見を發表しろ、と云ふのであつたら、僕は心から此の忠告を感謝し、且つそう心懸けたいと思ふ。

■僕は日本の社會主義運動が、今後如何なるラインに沿ふて走るべきかを知らぬ。然し乍ら、若し社會黨の諸君が政治運動によつて社會革命を遂げんとする事、猶歐米の社會黨の如くであるならば、その最後はま

た、歐米の改良的な、微温的な、社會民主黨と同一轍に出づる事を信じて疑はぬ。社會黨が革命的精神を失つて法律の製造機械となつたことは、吾々の目睹して居る事實である。社會黨が勞働階級以外の社會公共の利益の爲めに、中等階級の投票者の間に人氣を失ふ事を恐るゝが爲めに、勞働者の同盟罷工を裏切れる實例も、また吾々の熟知せる處である。議會は賭博臺であり、政治は其の上に弄ばるべき賽に過ぎない以上社會黨が必然に腐敗軟化するは固よりである。然し乍ら、吾々が最も惡む處は、議會政策が勞働階級の發意力を殺し、自己の力の意識を盲にして了ふ事である。

■吾々は急激な變化、若くは徐々たる進化に因れる社會革命を信ぜられやう。然し乍ら、眞の革命を成就する者は、理論に基ける是等の信仰で無くして、實に勞働者の團結である。而して僕は、此の社會革命に對つて準備せる組織の性質が、革命の調子（リズム）、行程（コース）、及び結果を定めるものだと信ずる。此の革命的勞働團體は自ら經濟的直接行動に因て、その解放を成就しなければならぬ。また政治的權威を排除して、生産の行程に理論的に包含されて居る規律を負はせる、勞働階級の社會的責任の意識を有さなければならぬ。それは勞働者たる事の本能の不斷の源泉であり、創造の情熱の無限の動力であり、進歩の最も強い捍杆なのだから。而してそれは既に、集合せる勞働者と、常に密接な關係を有せる將來の社會組織の核たる聯合團体との、有力なる協同一致の基礎に置かれた活潑な自働的生活を自ら要求する、産業的有機体の中に創られて居るのである。然るに、勞働者の直接なる經濟的行動に因らず、議會政策に因つて勞働階級の解放を成就しやうとし、所謂平和にして合理的なる社會革命の成つた曉は、中央政府が一切の生産分配を司どるといふ社會黨の政策は、勞働者の發意力、勞働者の社會的責任の意識を殺すものである。勞働者をして自主たらしめず、却つて奴隷たらしむるものである。勞働者をしてその寄生蟲の門に立つて、法律的恩惠に與からんとする乞食たらしむるものである。故に、僕は此の政策に對して反對し、此政策者に對して抗爭する者である。

■曾て社會主義の理想であり、また哲學であつた時代があつた。それは理想としては、個人的自由、世界同胞、萬人の平等をモットヲとした。それは哲學としては、文化を通じて解放せんとし、自由の鐵砧に於て人間の道德的、及び智識的の枷を破壞せんとし、智識の門を開いて、無智と迷信の幽靈を追ひ出さんとした。必然に亦、當時の社會主義は革命的であつた。蓋し歷史は自由に向ふ道が、鬪爭を經て導びかるゝ事を教ゆるからである。然し乍ら、是れは非科學的な、非實際的な、政治的社會黨前の時代であり、また空想家（ドリイマア）の時代であつた。近世社會主義は然らず、それは科學的となり、實際的となつた。科學的には、それは經濟事情が個人の意志や自覺を定めるのであつて、社會進化は一に經濟的行程（プロセス）に因て決せられ、個人の努力の如きは殆んど役に立たぬやうに云ふ。（現に吾々は、僕等が活動の必要を説いた時、經濟事情がまだそうなつて居ないから、寧ろ資本家の爲に勞働者をもつと貧乏にした方がいゝと公言した、社會主義者を記憶して居る筈である。）それは實際的には、單に投票を獲得せんとする政黨と化して了ひ、往昔謂ゆる非科學的だつた空想家（ドリイマア）が有して居た、火の如き革命的情熱は跡を絶つて居る。

再び相馬君に與ふ

榮

僕が君に公開狀を書いたのは、先日も早稻田文學社でお話したやうに、僕等から見れば實に身の毛のよだつやうな恐ろしい言葉や文句が、一向平氣な樣子で文壇に喋々せられてゐるのを驚いたからの事である。其等の人々が何れ程の見識と覺悟とを以て其等の文字を筆にするのかを尋ねて見たいからの事である。其等の人々の中に、僕の眞の友人を、僕と手を携へて個人革命と社會革命との道に强行軍する眞の友人を、見出したいからの事である。そして君が其の最初の槍玉にあがつた譯なのだ。

個人革命と同時に社會革命が必要である事は、『實際少し眞面目に考へてゐる者なら誰れでも氣のついてゐる事』には違いない。さうなければならぬ筈なのだ。しかし只氣がついたゞけで、それに表白或は實行が伴はない間は、要するに何にもならぬ。君は少くとも之れを表白した。今の世では此の表白と云ふ事だけですら既に珍しいのである。從つて僕は此の表白をする人を尊敬する。そして同時に又、表白其者に對する其人々の自重を要求する。即ちホンの一寸氣のついた位の事を、しかも自己にとり又社會にとつての一大事を、あんまり無造作に表白して貰ひたくない。十分に深い且つ十分に强い內容のある表白であつて欲しい、更に望むならば必ず實行の伴つた表白であつて欲しい。

『まあ早い話がそんなものぢやないか』位の戲談ではないのである。又個人革命と同時に社會革命を要求すると云ふ事は、僕にとつては、『そんな抽象的な境地に止まつて居る事』ではないのである。君の云ふ『如何なる點が今の人間に對し、社會に對して不滿足なのか、如何なる事を吾々は本當に望んでゐるのか、それを具體的に表白し、實行する』、それが僕にとつての個人革命同時に社會革命なのだ。只其の具体的が如何なる具体的になるかに就いて、君と僕とは別れるのだ。

君は僕を客觀に走り過ぎて主觀に足りないと云ふ。けれども僕の『鑛工場』をもう一度讀んでくれ給へ。『現實する者の一切は道理ある者である。道理ある者の一切は現實する者である。ヰリアム第三世及び其忠良なる臣下は、此言葉を以て、當時の專制政府、警察國家、封印狀裁判、言論壓迫等の有りのまゝの一切の政事的事實に、哲學的祝聖を與へたものであると解釋した。政治的事實ばかりではない。總てがさうなのだ。あの愚鈍なる普魯西人民に取つてはあの一切の現實が、たしかに必然のそして道理あるものであつたのだ。俺自ら俺の鎖を鑄、且つ俺自ら俺を縛つてゐる間、到底此の現實は必然である、道理である、因果である。』『僕等が自我の創造を主張し、生の要求を肯定するに努めるのは、要するに內なる誤まれる僕を破つて、本當の僕を表現しやうとするのだ』と云ふ君と何の差があるか。

君は又僕を創造的生活其者を味はうとする方に少しおろそかだと難じた。之れに就いても僕の『生の擴充』(第一卷第七號)をもう一度讀んでくれ給へ。『實行の前後は勿論其最中と雖、猶當面の事件の背景が十分に頭に映じてゐる實行である。實行に伴ふ觀照がある。觀照に伴ふ恍惚がある。恍惚に伴ふ熱情がある。そして此熱情は更に新しき實行を呼ぶ。そこにはもう單一な主觀も、單一な客觀もなく、主觀と客觀とが合致する。これがレヴオリユシヨナリーとしての僕の法悅の境である。藝術の境である。且

つこの境に在る間、かの征服の事實に對する僕の意識は、全心的に最も明瞭なる時である。僕の自我は、僕の生は、最も確實に樹立した時である。そして此の境を經驗する度每に、僕の意識と僕の自我とは、益々明瞭に益々確實になつて行く。生の歡喜があふれて行く。』此の僕の味ひ方に間違ひがあると云ふのか。これでもまだ足りないと云ふのか。僕の藝術家的生活に對するアンチパシーは、彼等の多くが此の實行の法悅を顧みないで、觀照の法悅にのみ耽る傾向に同感し得ないから起るのだ。

　此等の點に就いては、君は僕の『欠點に對して誇大的に云ひ過ぎた』のではない。恐らくは所謂社會主義者に對する君の定心から、僕自身をも強いて其仲間入りをさせて了つたのだ。迷惑至極である。僕は飽くまでも主觀的に行きたいと同時に又飽くまでも客觀的に行きたいのだ。物の本當の調和は、其の二つが全力を盡して衝突し合つた、其後の成行である。

　此處までは君の定心から生じた僕に對する誤解である。そして此處からは、それと同時に亦、恐らくば君の客觀的理解の不明確から生ずる、君の態度の曖昧さを自白する者である。

　君は現代社會の誤りつくられたる所以を『近代社會の經濟組織たる資本家制度や傳習的國家組織』に置く事に異存はないらしい。君は僕等の此の見解に對して『殊更楯をつく必要も見出さない』と云つてゐる。けれども此見解の內容に對する君の理解に就いては遂に一言も聞く事が出來なかつた。『罪は外存の社會制度にあると同時に僕等自身に寧ろより多くあるのだ』と云つた所で、其の『僕等自身』を腑甲斐なからしめる外存の社會制度に就いて明確な理解のない間は、『本當の僕自身の表現は』要するに不可能である。自己の表現は社會の中でなければ出來ない。自己其者も社會の中で始めて發生したのだ。從つて社會に對する明確な判斷のない間、個人としての明確な態度はあり得ない譯である。

　僕は何によりも先づ個人としての態度を君から教はらうと期待はしてゐなかつた。今日の社會制度に對する君の理解の程度を聞きたかつたのだ。個人としての態度はそれからの事である。團結の事も反逆の事も君が『十分に合點の行く』やうになるのは、その後の事である。君は『云ひたい事の十分の一も云へない。改めて詳しく書く』と云ふ。願くば其時には僕の此の希望を第一に滿たして戴きたい。そして其上で僕も十分に論ずる事としやう。これは君と僕と二人だけの問題ぢやない。紳士閥中の進步思想家と平民階級中の革命家との久しい間の問題なのだ。此の問題の解けない間、君と僕とは、紳士閥の進步思想家と平民階級中の革命家とは、せい〳〵敵味方の間の友人となるに過ぎない。味方同志の友人とはなれない。お互に劍をとつて殺し合はなければならぬ情けない友人に過ぎない。

　僕等が敵として戰はねばならぬ相手があるのかないのか。豫め敵を認めた僕と、認めない君と、何れが正しいか。これも其の後の問題である。猶最後に君が云つた、君と僕との態度の差の如きは、君をも僕をも何れ劣らず偉さうに見せかけた、君が獨りぎめの差にすぎない。もつと明確な差が、更に此後の吾々の議論、及び生活の中に現はれねばならぬ。

　何んだかまるで辯解ばかりになつて了つた。紙面と時間との都合で、今はこれだけにとゞめて置く。そして君のこんどの文を待つ。

馬と人との對話

荒畑寒村

同じ資本家に飼はれて居る馬と、雇はれて居る勞働者。馬は四肢逞ましく肥え太つて、大きな眼は火のやうに輝やき、毛は天鵞絨のやうな滑らかさと、光澤とをもつて居る。勞働者はそれに反して、襤褸の下に見るも哀れに瘠せ衰ろへ、皮膚の色は黃ろく萎び、眼にも唇にも、生きてゐらしい光りは些しも無い。

馬 （憐れむやうに勞働者を見やつて）

おい人間！大變悄げて居るやうだが、如何したい？。お前、また主人に、何か叱言でも云はれたナ？。

勞働者 （急にムッとして、垂れて居た頭を上げる。）

馬鹿なことを云へ。此の工場に十何年て使はれて居るが、まだ仕事の上で、主人から一度だつて叱言を云はれるやうな失策をやつたことは無え。

馬

それじや、何だつて今、主人に頻りに頭を下げて居たんだ？。

勞働者

實は、また俺ん處で餓鬼が一人增へたのだ。それに此の二三年といふもの、暮しがだんだん上るのに引換へて、給金は些とも上らず、到底やり切れねえから、今日は給金を上げて呉れつて賴みに來たのヨ。

馬

それで如何したい、うまく往つたのか？。

勞働者

うまく往つた位なら、何でこんなに悄げて居るものか。主人の奴、酷い事を吐しやがる。給金を上げる處じや無え、近い中にまた新しい機械が外國から來たら、人をウンと減すんだとヨ。そしてその云ひ草がいゝや。米の飯を食ふ蟲共が、十人で十時間かゝつて仕上げる仕事を、機械は一臺で二三時間もかゝればやれる。それで居て、幾ら永く使つても、給金なんか上げてやる心配は要らねえ。詰り、勞働者なんてえ者は、機械の番人だ、奴隷だ、たまに油でも差すより外に能の無え者だ——と、こうだ！。

馬 （さも感心した風を裝ほつて）

成る程。それが、お前が十何年間も叱言一つ云はれず、一生懸命まつ正直に稼いだ、トドのつま

りなのだネ。

勞働者

といふ譯でも無いんだが、世の中が文明に進むに從つて、犧牲が出るなア如何も仕樣が無えんだ。俺達はその犧牲よ、惡い月日の下に生れたのが身の不運よ。

馬（いくら我慢しても、輕蔑が抑へきれなくなる。）

フン、文明か。先達ても解雇されたお前の仲間が、食ふ事が出來ねえで氣違えになつて、病身の女房と餓鬼を二人も縊り殺した上、己は体に火を點けて狂ひ死に死んだといつたが、やつぱり其奴の仕業だナ。然し、何だつて、默つて文明の犧牲になんぞなつて居るんだ。働らいても食へねえ、働かなくても食へねえなら、同じ食へねえでも、働らかねえだけ氣が利いてるじや無えか。

勞働者

そうは往かねえや。働らくのは、人間の權利だからナ。人間と生れて來たら、働らかなけりやならねえものなんだ。働らかねえ奴ァ、人間の屑なんだ、穀潰しなんだ。

馬（明らかに侮蔑の調子で）

ハヽヽ今度ア人の權利とお出でなすつたナ。おい人間！、其奴だョ、お前やお前の仲間達を、永い間苦しめて來たなア。勞働者が犧牲にならなけりやならねえ文明は、それは眞實の文明じや無え、只だ資本家だけの文明なんだ。そして人間の權利なんて形而上的な云ひ草は、此の資本家文明が、お前達勞働者をもつと密着に、もつと堅固に、經濟的義務に釘付けやうとする鋲なんだ。其奴はお前達に云ふ『俺はお前達を自由にして、慇れな活計を立てさせてやる。そしてお前達の資本家を、富豪にしてやる。只だ一口の麵麭を買ふ爲に、お前達の自由を賣るやうに、自由にしてやる』其奴はまた、お前達を一日十二三時間も、牢屋のやうな工塲へ押し込めるんだ。其奴はお前達が、骨の髓まで疲れ切つて了はなければ、放しては呉れないのだ。お前達に、犬小舍よりも劣つた家へ歸つて、砂のやうな飯を搔つ込んで、丸太のやうに轉がつて寢入るだけの力しか殘らなくなる迄は、其奴は決して勞力を絞る鐵の腕を休めないのだ。お前達に賣ることの出來ない只だ一つの權利と云つたら、それは租稅を拂ふ權利だけじや無えか。

勞働者（自分の羞恥を隱さうと思つて、故さらに怒つて叫ぶ。）

何を生意氣なことを吐しやがる。たとへ暮しは如何だらうと、俺は人間に生れて來て居るんだ。手前達のやうな畜生に較べれば、如何に幸福だか解らねえ。人間は、生き物の中でも、一番高等なんだからナア。

馬

その高等の生物で、萬物の靈長たる人間が、何ていふ慘めな態だ。お前は『人間』だといふ事だけが何よりも幸福なやうに云ふが、馬や牛にも劣るやうな生活をして、何で萬物の靈長に生れた甲斐があるんだ。お前のやうな馬鹿な二足獸は、俺達を四つ足なぞと云つて輕蔑するが、然し文明だの進歩だのといふものは、人間の賃銀勞働者を虐待して苦しめこそすれ、俺達四つ足共にや全く優しいお袋なんだ。それア俺達の間にも、資本家階級もあれば勞働階級もある。俺なぞは、まあ資本家階級に屬して居る一頭なので、人間と同じこと、矢張り働かずにノラクラ日を送つて居る。で、俺には調馬師だの、騎手だの、厩童だの、馬丁だのと云ふ、色んな人面獸が侍づいて居るんだ。そして、毎日のやうに鬣を梳く、毛を搔く、刷毛を懸ける、寢床の上げ下しをやる、俺の排泄物を掃除するぞ。俺もたまには氣の毒だとも思ふが、また餘り卑屈從順な態度が癪に障つて、『有難う！』てつた風をして、故意と嚙んだり蹴つたりしてやるんだ。

勞働者

畜生の分際で、酷い眞似をしやがる。俺なら、打ちやつちや置かねえのに。

馬

だが、俺はまだお前の主人のやうに、お前達の勞力を盜みやしねえからナ。……俺はまた、よく野原へ運動に出かける。そして、苜蓿だの、燕麥だの、色んな甘い物を食ひながら、若芽や草花の香ひに積まれて居る、空氣と日光の中に浸るんだ。おい人間！。其處にも尊敬すべき萬物の靈長が美しい景色も眺めず、快い大氣を深く呼吸しもせず、腰を扛げ額を汗で濡らして、自分の口へなんか一粒も入らない米や麥を、一生懸命に育てゝ居るぜ。俺はあの貧苦に窶れた生物の激勞を見る位ゐ、不

愉快と憐愍と、侮蔑と憤怒とを感ずることは無い。

勞働者

それア、お前の云ふ處も幾らか理に適つて居る。『犬になつても大所の犬』つて云ふ位だから、畜生でも富豪に飼はれる奴ア、貧乏人より餘程幸福だらうサ。だが、馬にや意志が無え。だから結局、馬丁や騎手の意志通りに、鼻面を引つ張り廻されるんだ。

馬

だから、お前達はお目出たいつて云ふんだ。成る程、俺達には資本家の爲に十時間も働らいて、一時間分の割前しか貰はねえやうな、そんな馬鹿々々しい意志は無え。餘り働らいて品物を拵え過ぎた爲に、工場から暇を出されると、倉庫に充滿になつて居る品物を勝手に費はうとはしないで、賃銀なぞ幾らでもいいから仕事をさせて呉れと嘆願するやうな、そんな不合理な意志は持たねえ。然し、俺は俺の意志を資本家の上に置き、また美人を拉した貴顯紳士が、俺の厩に來て排泄物の咽つぽい惡臭の中で、茶を飲んだりするやうな、社會的の力を左右にされるんだ。そして此の手合ひが競馬でもやつて見ろ。何千人といふ紳士淑女が集まつて、俺達の形や、毛色や、走るのや、跳るのを鑑賞し、品評するのだ。その中には、二足獸の社會で隨分崇拜畏敬されて居る手合も居るが、俺は決して敬ひもしなけりや畏れもしねえ。それ處か、俺の仲間にやア、チャンティリイで大競馬會が行はれた時、白耳義の國王の頭付が氣に入らねえつて、傍へ來たのを蹴つ飛ばしたつて奴がある位だ。すると馬好の國王は、丁寧に馬に詫を云つたそうだ。如何だい、萬物の靈長がこんな事をやつて見ろ、それこそ罪九族に及ぶだらう。

勞働者

それア、人間は禮儀といふものを知つて居るからナ。社會的位置に對する禮儀といふものを、恩惠に對する尊敬といふものをナ。

馬

何だと?、恩惠に對する尊敬だ?。お前達がそれを知つて居るといふ風か。こう人間!、ロマノフだの、ホウヘンツオルレンだの、そんな王朝や皇室の先祖よりか、もつと正確な先祖を有して居る俺達が、高い社會的位置で腐敗せず、放蕩だの、

金剛石を飾つたり、三鞭酒を飲んだりする贅澤だのに染まなかつたのは、如何にお前達にとつて幸福だか解らねえのだ。そうでも無らうものなら、お前達は今よりもつと苦しまなきやならねえ。それによ、俺達が印度人の部落を彷徨つくベンガル虎のやうに、人間を常食としない事もお前達に對する恩惠だぞ。若し俺達が食人獸だつて見ろ、俺達の命令なら何でも肯かねえ事の無え資本家は、すぐ屠人所を作つて、金で買ひ取つたお前達を屠殺させらア。そして屹度赤兒のロース、娘のハム、若い女のヒレ肉なぞで、俺達を御馳走するだらう。それや是れやを考へたら、畜生だの、四つ足だのと、大きなことは云へた義理じやあるめえ。

勞働者（撫然として嘆息する）

然し、そんな好きな御託を吐けるのも、詰りはお前のやうな、馬の中の資本家だけじや無えか。同じ馬仲間でも勞働者は、矢つ張り俺達と同じ運命なのだ。まづい物を食はされ、酷い處へ寢かされ、そして終日重い荷物を曳かされてヨ……。

馬（更に一層昂然として）

まあそう早合點して、人間の勞働階級を馬の勞働階級と一緒にして呉れるな。成る程、馬でも勞働階級の奴は、僅か許りの燕麥の爲に働らかなけりやならねえ。然し、人間の資本家てえ奴は、同類の勞働者には與へねえ色んな特權を、俺達の仲間にや許して居るんだ。第一は生存の權利だ、文明社會の勞働者は誰れ一人、生存の權利を有つて居る奴は無えが、馬は持つて居るんだ。假へば、俺達の仔馬を見ろ。牝馬が胎むと、色んな苦しい勞役からは一切脫れさせられて、田舍の牧塲で放し飼ひにさせられるのだ。そして、平和と安易の裡に仔を生んで、その充分成長する迄は、哺乳したり、牧塲のうまい草を食はしたりして育てゝやるんだ……お前、先刻また子が增えたと云つたな。お前の女房も矢張り萬物の靈長だらうが、如何だい、こんな理想的な子の育て方が出來るか。生活の爲に、子を里へ出したり、毎日慈善家と稱する詐欺師の團体へ預けたりして、分娩後三日と經たない女が勞働に出るのは未だしも、育てる事が出來なくて子を捨てたり、產む事を羞ぢて墮胎したりするじやねえか。

勞働者（默然として一語も無い）

馬

資本家文明はお前達に勞働の義務を負はせた代りに、生存の權利を奪つたのだ。それでも猶ほ生きやうとするから、死よりも慘めな生活が始まるのだ。曾て佛蘭西の國會で、社會黨の議員ボウル、ラフアルグが、女は分娩の前後二月間づゝは、工場勞働に從はざる權利と方法とを有さなくちやならねえと云つたら、憤怒反抗の暴風雨が起つたそうだ。此の動議は、正しく文明の倫理を轉倒し、資本家制度を震撼させるものだつたのだ。全く何ていふ、不合理な、極惡非道な、恐怖寒心すべき罪惡だらう。仔馬の權利を、人間の嬰兒にも與へやうなんて云ふんだからなア。

勞働者（羞ぢて顔を垂れる）

馬

巴里の乘合馬車會社が、藁の代りに泥炭と鞣皮の屑を、厩舍で用ひて居る事が知れた時、紳士閥新聞は筆を揃へてその殘酷非道を攻撃したそうだ。そんな寢床に寢させられる、不幸な馬を見るに忍びねえと云ふんだあナ。紳士閥哲學者のショツペンハウエルなぞは、馬の脊を打つ鞭の音を聞く毎に胸が割けるやうだと云つたそうだが、何處の文明國へ往つて見ても、そういふ手合ひの作つた動物愛護會なんていふものがあつて、ヤレ馬に何貫目以上の荷を曳かせちや可かんの、ソレ犬に猿轡を箝めちや可かんのと云つて居る。その癖、今云つた馬車會社にしてもだ。馬は一日に五時間から七時間位しか働らかないが、雇はれて居る勞働者は十四時間から十六時間も働らかされて居るなんて事は、一向お構ひなさらねえんだ。

勞働者（急に顔を振り上げろ、瘠せた蒼い顔の筋肉は緊張して、眼には怨憤の情が火のやうに燃えて居る。）

そうだ、全くだ、お前の云ふ通りに違えねえ。俺は今まで、幾度もそういふ疑ひを、朧ろげに抱いたことがある。だが何時も、人間の權利だの、勞働の權利だのといふ、馬鹿〳〵しい手品で欺されて來たのだ。然しもうもう欺されやしねえ、俺はもう、人間の權利なんざ欲しかねえ、馬の權利が欲しいのだ。俺は今日から、勞働の權利なんか捨てゝ了つて、怠惰の權利を求めるのだ。俺はもう乞食のやうに、資本家から賃銀の施しは受けねえ。彼奴等の膳の落ちこぼれは拾はねえ。だが、

俺は俺の勞働に對する、當然の割け前を取るのだ。俺が製つただけは、俺の物にするのだ。……けれ共、そうするにや如何したら宜いんだ。お前は、そのやり方を知つてねえか。

馬

お前の仲間に、人間の自由だの權利だなんてえものは、人間の奴隷といふ事に過ぎねえのを知らせるんだ。お前の仲間の眼を開かせて、此の社會の不合理を見せてやるんだ。一切の道德も倫理も、經濟も、政治も、此の不合理の上に建てられて居ることを知らせるんだ。そして勞働者自身の力で、此の不合理をブチ毀して、新しい社會を作るんだ。……おい人間!、資本家から賃銀の施しを受ける乞喰でなくなつて來い。同じ人間に支配される奴隷でなくなつて來い。そうしたら、お前達を高等な生き物として、萬物の靈長として交際つてやらア。(完)

ショウ曰く　寒

野蠻人は木と石の偶像を崇拜し、文明人は血と肉の偶像を崇拜する。

政府とは、偶像崇拜の組織である。

大久保より　榮

■この八日にまる二た月目に床を離れて、四五日間葉山に遊びくらした。そしてまだ多少殘つてゐた病勢を全く振ひ落して歸つて來た。もう編輯にも間近いのだし、大いに書く積りで歸つて來たのだが、しかし長い間話す事と考へる事と書く事とから遠ざかつてゐた怠けぐせは、容易に筆を執る事を僕に許さない。とう〳〵本月も行數の計算をするだけで濟まして了つた。

■僕の一時的の病氣は全快したが、しかしまだ永久的の病氣は殘つてゐる。それに堀保子も同じ病氣で苦しめられてゐる。何れもまだホンの初期には過ぎないのだが。で、近日僕の一家は、當分何處かの海岸へ轉地する積りだ。

■雜誌の方は從來寒村と僕と二人で一切の責任を負ふてゐたのだが、來月からは安成貞雄にも其の責任を分擔して貰ふ。これは最初から多少ボンヤリとさうなつてはゐたのだが、僕の轉地を機として、明白にさう決定したものに過ぎない。安成も之れを機として大いに書き出すに違ひない。轉地後の僕も、今迄よりはもつと書けやうと思ふ。

■暮と正月と二回休んだセンヂカリスム研究會は、この第三日曜の十八日から始まつた。次回即ち二月一日から數回に亘つて、寒村はサボタージユ論を、僕は直接行動論をやる。此の方も、僕の轉地後と雖も、勿論續けてやつて行く。僕も每回出る。

——一月二十三日——

神様が人間に殺された話

安成二郎

小作の三太の嬶は神殿の石段の前に膝を跪いて、長いことクド〳〵と神様にお願ひを申上げてゐた。

お願ひの趣旨は『子供を一人授けて貰ひたい』と云ふので、三七二十一日の願掛けを思ひ立つて、もう今夜は十五日目であるが、成るべく詳しい事情を申上げた方が、神様も情状お酌み取り下されて効験を現はされるだらうと考へて、嬶はいつも二十分も三十分も繰返し〳〵子供の欲しいわけを申上げた。

それに依ると、三太も嬶も子種が無くなるほどの年ではなかつたが、しかし一緒になつてもう十二年にもなるのに未だ一人もトマらないのであつた。その内に〳〵と思つて仲好く暮らして來たが、さて三十も過ぎて子供が無いとなると、急に老い先きの樂しみも心頼りも無いさびしさを感じ出した。

『……神樣ア、お願ひでございますだ。悴でも娘でも可えだに……』と云ひかけて、嬶はヒョイと顔を上げだ。ギシ〳〵と内殿の方で物音がする。

と、眞白い幻が目の前に現はれた。嬶は狼狽て、石段に額をすりつけた。有りがたい神様を見て目が潰れては大變だと思つた。

神様は雲の上を歩むやうにスーツと出て來た。ザア〳〵と社頭の杉を吹く夜風の外に物音は無かつた。眞暗い中に浮んだやうな神様の白い姿はいかにも神々しいものであつた。神様は嬶の傍まで來ると、嬶の頭からパッと白いものを被せかけ、輕々と抱き上げて内殿へ消えて行つた。

三太はゐろりに足をくべてぼんやりしてゐた。煤けた自在鍵に危なつかしく掛かつた鍋の中で、馬鈴薯がゴト〳〵煮えてゐた。その甘さうな匂ひを嗅ぐと、三太は鍋の縁へ犬のやうに鼻をすりよせた。

『どうしただべえ、あんでコゥ遅えだべえか』

三太は空腹を抱へて嬶の歸りを待つてゐたが、とう〳〵堪らなくなつて、鍋の中から大なき芋をつかんで口へ抛り込んだ。フゥ〳〵しながら熱い芋を口の中でころがしてゐる愚直な三太の顔が芋を喰つて了うとたん〴〵嶮しくなつた。

『どうしただべえ』とも一度云つて、三太はやけに榾を投げ入れると、火が氣持よく燃え上る。

其處へガタ〳〵云はせて嬶が戸を明けて歸つて來た。

『あんでコゥ遅えだ。腹ア空らして待つてるでれえか』と三太が怒鳴つた。

『怒るでれえだョ、神様の罸イ當るだ』

『あんで罸イ當るだ。神様さ怒つたでれえだ……。汝遅えで腹ア立つたよア、毎晩でれえだか、ちよつくら願上げて歸るわけに行かれえだか』

『己ア勝手に行くでれえだョ、三太さあ、二人イ談合ゥ上の願掛けでれえだか』

嬶は喧嘩をしては神様の御利益が臺無しになるかと思つたのでいい加減にして、急いで鍋を下ろして膳立てにかかつた。三太は

ブツ／＼云ひながら膳に向つたが、一合の德利が空になるとまた云ひ出した。

『お宮ア此處から何町あるだア、三町とれえだよ、あんでお詣りに一時間もかゝるだア』

『三太さあ、酒足りれえだか、あんで怒るだア』

『酒のことでれえだ。己ア腹空つて待つてるちうこと忘れたゞか』

『そんだら云ふだ、飯イ終へてから云ふべえ思つたゞが』嬶はキチンと坐り直してから、

『三太さア、今夜も神樣アござつたゞ』

それを聞くと三太も急いで膝を折つた。

『そんだらあんで早ヤ云はれえだ、いつもの神樣でござつたゞか』

『己にアよく分られえだ、全るで夢みたいだ』。

三太はヒヨツと思ひ出したやうに、

『よんべもござつたて云つたでれえか、ちつとべえ可笑しいでれえか』

『あんだて！』嬶は三太の失言を咎めるやうに吃驚して、

『そんだこん云はれえだョ、神樣の罰イ當るだア、神樣のこた俺らにア分られえだ』

三太は默つて考へてゐたが、

『だとつて、神樣ア七日七日にござらつしやるでれえだか、今夜ア十五日目でれえだか』

『だから、神樣のこた人間にア分んれえだョ、三太さあ、疑ぐつてるだネ、ほんとに罰イ當るだョ』

『おまけに昨夜の今夜だもん』と三太は自分の云ふことがだん／＼眞實らしく思はれて來た。

『己ア疑ぐるだョ、七日七日にござらつしやるちこんも神樣にア可笑しいでれえか』

『あんで可笑しいだ、三太さあ、外の願掛けでれえだョ、悴イ授けて下されに神樣ござらつしやるに不思議れえだ』

『馬鹿野郎！』と三太は怒鳴つた。

『汝。悴イ何人欲しいて願掛けてるだあ、一人で結構だんべえ、一人べえ授けて下さるて二度も三度もござらつしやる神樣ア何處にあるだア、ほんとの神樣だら一度で澤山だんべえ』

三太はいきなり立ち上つて、ウンと嬶を毆りつけた。目をつり上げ、氣狂ひやうになつて怒鳴つた。

翌る晩、白い神樣が嬶へ白いものを被ぶせやうとした時、三太は橫合から飛び出して丸太で神樣の頭を力任せに毆つた。神樣はウンとも云はずに石段を轉げ落ちた。

■

馬鹿野郎、コン畜生と云はれても、ぢつとしてゐしが、子を生みにけり。

■

上の子の着物を着せやうと思ひゐしに、生れし子には、ちんぽこがなし。

—安成二郎—

人間屠殺所

ラムスッス作
佐藤緑葉譯

四　最後の夜

私は寢臺の上に横になつて、靜かに數をかぞへてゐる。もう眞夜中だから、眠らなければならない。けれども、私はまだ眠る事が出來ない。

部屋は鼾の聲に滿ちてゐる。彼等は私の右に左に横はつてゐる。私は寢臺の板張りを見あげる事が出來るのである。もし仰向けになれば、私は寢臺壁に添ふて、戸口から窓まで、一つは一つの上にかさなつてゐるのである。そして其各々の寢臺に一人づゝの兵隊が眠つてゐるのである。

折々誰かゞ寢返りをして、重苦しく反對の側に向きかはる。

遙か彼方の窓の近くで、誰かゞ眠りながら呟いてゐる。突然、その男が高い聲で叫びだす。『……私ぢやありません。私は針金の一片にだつて觸りやアしません。あなたは私を盜賊だと仰有るんですか？』

その聲は、恰も彼が眼を醒ましてゐる時のやうに、はつきり響いた。私は將にその男に話しかけようとした。すると、あたりは再び靜かになつた。私は其次に何が起るかと思つて、じつと聽き耳を欹てゝゐた。併し彼は靜まりかへつて、再びその聲をつゞけてゐる。彼はまだ其仕事場にゐるのである。併し、明朝は戰爭のために出發するのだ。

私の周圍には、眠つてゐる人、鼾をかいてゐる人のほかには、何もゐない。

驚くべき事ではないか、眠るべきに眼をあいて横はり、未來を見守つてゐる者が兵營にゐるのだ。

私の考へは故郷の方へ飛ぶ。妻は今晩よく眠つたらうか？私の事を考へる折があつたらうか？どうして小さい奴は起き上つたらう？あいつの齒はあいつに苦痛を與へるのだ……。餘り若いうちに結婚するのはいゝ事ではない。獨身で召集せられた方が今では却てよいのだ。戰爭はいつ終るだらう？吾々はごく僅かの貯金を持つてゐるばかりである。併し今日のやうに物價騰貴の際には何の役にたゝう？妻や子供の手當は極めて僅かである

から、屋賃を支拂ふにも足らないだらう。あの郵便貯金が無くなつた時には、妻は何處から錢を求めるだらう？彼女は裁縫をするだらう。けれども、外に何百人も裁縫をする者が出來たらどうするだらう？さうだ、其時は妻は何か小さな商賣、八百屋の店を開くだらう。けれども、外にも何百人といふ人が、同じやうな店を出したらどうするだらう？

國家は汝等の妻子にも責任を課するのだ、これは昨年聯隊命令を與へられた時言はれた言葉である。さうだ、出發に際して、最も惡い事を想像する必要は無いのである。戰爭は速かに過ぎ去るに相違ない。恐らく大戰鬪といふ程の事は起らないだらう。彼等はそれに就てなるべく良い事を考へ、そして多分救濟の道を講ずるだらう。

やがて、私の心も幾分か樂になつた。私は想像の中に、私自身が再び事務所の机に返つて、仕切狀を書いてゐる處を見る。時計を見あげると——それは丁度規定の時間に近づいてゐて——僅に今五六度ペンを動かせばよいのである。そこで吾々は急いでおしまいにする。吾々は事務服を釘にかけて、別の着物を引つかける。そしてすぐ街に出るのである。何となればドラが晩餐を待つてゐるからである。

この時、吾々はもう、二つの大きな三連ランプのある町役場の傍の橋まで來てゐる……。誰か其橋の欄干のそばに立つてゐる。そして少しも動かずに、じつと濠割を見おろしてゐる。それは女だ。彼女は勝手から眞直に飛び出して來たに相違ない。何となれば女はエプロンの紐をうしろに引きずつてゐるからである。その時突然、私のよく知つてゐる紅い縁を取つた女のスカーツが私を撲つた。私が女の後ろを通ると、女は一語もなく振り返つて、ぼんやりと私を眺めてゐる。

「お前、ドラぢやないか？」

すると彼女は顔を俯せて、涙を流して、勢ひなくひとり言をいふ。

「あいつ等は私の夫を撃ち殺してしまひました。」

「でも、ドラ」私は心配なので、妻に向つて叫んだ——何となれば、私の頭に、ふと妻は病氣であるといふ考へが浮んだからである——「私はこゝ

にゐるぢやないか？お前はもう私を忘れたのか？」

併し妻は頭を振つた。そして悲しさうに向ふを向いて、見知らぬ人のやうに行きかける。

「ドラ　ドラ！」私は叫び出した。そして手を消えてゆく形に向つて擴げた。咽び泣きが私の咽喉を詰まらせる……。

やがて私は起き上つた。そして寢臺の上に坐つて、肘の上に身体を休ました。窓を透して長く引く起床喇叭が鳴り渡る。曙が窓玻璃を透して覗きこんでゐる。

で、私は少しも眠らなかつた。そして面白い夢も見なかつた。併も私はいやな氣持を打ち拂ふ時を持たなかつた。何となれば、もう足音が廊下にきこえたからである。圓鋲の靴がガタ〳〵と廊下を往復する。扉はあけ放された。

「外へ出ろ！」快活な聲がきこえる。

之れは當番の軍曹である。この時は、彼はもう次の戶口に行つてゐる。眠い人達が銘々の寢臺から起き上り、欠伸をしたり、兩手を擴げたりする。そして寢臺から出て、寒さにふるへながら、自分の制服をつけてゐる。欠伸をして、彼等は四肢を伸ばして、第二番目の朝の歡迎の合圖のあるまで、其兩手をバタバタと打ち振る。『朝食』この言葉は一同に生命と生氣とを與へる。

五　出　發

吾々はもうすつかり武裝して、兵營の庭に集つてゐる。吾々は銃を交叉して休んでゐる。今日はもう誰も武器を檢査したり、又は之れに類した事をしようと考へる者は無い。あらゆる物が、最早競走の足なみで突進して行く。

「集れ！」

「背囊つけ方用意！」

十分に準備した背囊は、一人の手にとつては何といふ重さだらう。けれどもそれを銘々の小さな背に脊負ふ時は、もうそれ程には感じないのである。

「氣をつけ！」

「擔へ銃！」

吾々が練兵場へ進み出た時に、中隊長の號令は非常に勇ましく響いた。吾々は敏捷に銃を肩にし

て、練兵場へ進んで行く。

「小隊つくれ！廻れ右！前へ進め！」

吾々は號令に從つて、四列になつて敏捷に廻轉した。

「第五、第六、第七、第八中隊！」練兵場の眞中へ出て來た少佐が叫んだ。

吾々は第八中隊である。で、第七中隊の後に從つてゐる。兵營の門は開かれてゐる。吾々は營門より進み出た。吾々の足は大練兵場に於ける足ぶみの調子で町の鋪石道(ペーヴメント)の上を進んで行く。

「並足！」

吾々の足の筋肉は弛められて、稍々自然の歩きぶりで進んで行く。

町には人民が充ち滿ちてゐる。彼等は兩側の鋪石道に立ち並んで、吾々の通つて行くのを眺めてゐる。時はまだ靜かな早朝であるにもかゝはらず、全町悉く起き上つて集つてゐる。彼等は床の中に留つてゐられなかつたのである。彼等は兵隊の行進を見ようとしてゐる。

彼等はその眼で吾々を歡迎し、其手を吾々に振つた。

十五歳位の少年が吾々の横を走つてゐる。彼の兄弟が吾々の隊にゐるのである。

「お母樣がお大事につて云ひました、お母樣はもう良くなりましたつて――でもまだ起きられる程は良くなりませんよ、それでも今朝僕と一緒に來ようとしたのです――そしてこれを上げて下さいつて」

かう云つて、少年は其擴げた手を兄の方へ突き出して、何かしら紙に包んだ物を渡さうとした――錢！併し兄はそれを押し戻した。

「持つてお歸り。お母樣が御自分でお使ひになつた方がいゝ、そして十分に氣をつけて、私が歸る迄にはすつかり良くなつてゐるようにつて、さう私が言つたつて云つておくれ。」

少年はしぶ〳〵ながら其錢をポケットの中に入れた。

吾々の少し前を、ひとりの若い女がチョコ〳〵と歩いてゐる。吾々は少しく大跨に歩いてゐるので、彼女は一緒に行かうとして、ともすれば驅け出すようになる。彼女の足は凹凸の鋪石道に躓く事があるけれども、それでも彼女は決して其眼を

夫から轉じようとしない。彼等は愈々といふ最後の瞬間に、お互に何を云はうとするのか、吾々には捕へる事は出來ない。併し吾々は彼女の顔の表情と、それからおかしい程感動してゐる熱心を見る事が出來る。

今や兵隊に從ふ群集は、次第に町の中に增へて來た。彼等の家族の仲間と見える數人の人々は、各小隊の傍を走つてゐる。不安さうな顔付をした白髮の父や母や、姉妹や、戀人や、妻など。

彼等の中に誰でも一眼で、今や母親にならうとしてゐるといふ事を知り得る一人の女がある。さうだ、彼女は寂しいそして侘しいベッドへ置かれるのだらう。

私の右を行進してゐる一人の無口な田舍者は、今まで幽鬱な顔をして、眞直に前方を見てゐたが、この時半ば私の方へ向いた。

「今生れやうとして、、父爺にあふ事の出來ねえあかんぼが隨分あるでせうね。」

かう口を切つて、それから彼はその兄弟に就て話しだした。兄弟といふのは二日前に除隊になつたのであるが、妻が產室の床についた其日に軍旗の下に召集せられたのである、それ故彼は妻がまだ大厄を免れぬ中に彼女と別れたのである。

「私はまるで人間ぢやねえやうに思はれるぢやありませんか。」

大皷と笛の音勇ましく湧き起り、愉快な行進曲が鳴り出した。

誰かゞ、群集の中の何處かで、高い聲を出して萬歲を叫んでゐる。

「ヒップ！ヒップ！フウレイ！」

他の人々が之に和する。その聲は悉く町の通りへ擴がつて行て、再び消えないのである。併しこの騷ぎも私の横の田舍者を動かさないのである。

「こりや一体あなた、どうしたつてんですね？あの人達アまるできちげえだ。全くたはえもねえ。」

私は男を眼の隅から眺めた。彼は彼自身の憂鬱な考への中に深く沈んでゐる。やがて彼は再びいふ。

「俺ア女房と三人の子供とをうちへ殘して來ました。あいつらア一日に四五ペンスより外取れねえんだから、あとは成り行きにまかせるより、どうする事も出來ません。これが四人の者の生活で

さア。」

誰かゞ彼に元氣をつけようと試みた。

「併し誰か面倒を見てやる者が出て來るだらうよ！」

「誰が？」と、深い呻き聲がきこえた。「その人達だつてみんな自分の事を見ないぢやならないでせう。俺がうちへ歸る時にア、あいつ等は、うちの奴等の生命のかゝつてるバケツを、蹴飛ばしてるでせう。一番良いこたアもう二度とうちへ來ませんよ。」

其時、彼の不平の中へ、大きな太鼓の音が鳴り込んで來た。物憂い反響が漂ふてゐる。それは軍樂隊の先驅である。太鼓と笛との不平を已めよといふ命令である。

やがてまた深い警告がある。

ドンドン！

喇叭卒は聯隊行進曲を吹き初める。

今や――軍樂隊は悉く鳴り初める。誰でもそれに對して思ふまゝに足を出す事が出來る。軍樂の調子は興奮してる町々に傳染し、喇叭の譜は家の壁に反響して、喜ばしく血を湧き立たせる。そして頭の中に宿る夜の惡魔を跋ひ去る。兵卒の筋肉はしつかりと成り、頭を眞直に伸ばし、そして足は誇らしい歩調を保つて運ばれる。かゝる歩調と號令は、全体の群集に傳染する。其効果は電氣のやうなものである。彼等は其手を鋪石造から振つてゐる。彼等は其手を窓から振つてゐる。彼等は其手をバルコンから振つてゐる。空氣はハンケチに眞白である。やがて前方の誰かゞ歌ひ出す。一人また二人、それについで叫んだり歌つたりする。その調子は遁れ出る道を得るまで次第に烈しくなつて、吾々の頭の上に、嵐の前の風のやうに渦を卷いてゐる。

國歌が歌ひ出された！

全町悉く之れに和する。

軍樂隊は遂に之等の人の歌ふ歌に降伏してしまふ。そして嚴かに國歌に調子をあはせる。

群集は悉く帽子を脱いでゐる。吾々は輝く顏より外には見る事が出來ない。吾々は同じ言葉の下に進み、國民は熱心に燃えて燒けてゐる。

吾々は狂氣のやうに歌つてゐる町の中を行進して、遂に停車場につくまで、そこのプラットフォ

ームに立ち止るまで、歡呼の聲をきいてゐた。汽車はもうそこに待つてゐた。

陸橋は、レールを越えて向ふまで、群集で眞黑になつて、吾々に向つて叫んだり、どよめいたりしてゐる。

吾々はもう番號を付けられた。

一區劃に八人づゝである。

「タラ、タタ！」乘車喇叭が鳴り出して、列車の扉が開かれた。吾々は辛ふじて吾々の背嚢や銃を交叉して、列車が動き出した時に吾々の帽子をかぶつた。雷鳴のやうな萬歲の聲の中に、吾々は停車場から軋り出した。そして遙か彼方に、褪えて行く叫び聲、消えて行く呟きを殘した――町は彼等の兵隊に、最後の別れを叫んでゐる。

吾々は吾等自身を愉快にした。吾々は腰をかけて、自分のパイプで煙草をのんだ。三人の者は、すぐさま變へて了ふ事が出來ないで、もうカルタ遊びを初めた。また別に二人の者は隅の方に坐つて、お互にその頭を寄せた。例の田舍者は私の傍にゐるが、併し何物にも興味を起さない。

私は窓の外を眺めてゐる。そして私の眼の前を飛び去つて行く景色を見守つてゐる。喜びがまだ私の血の中に溫かゝである。私は千載一遇の日にあつたのである。何處に居る人でも、日々の塵の上に立つてゐる多くの人々は、もうこらへる事が出來なくなつて、たとへ遙かに隔つてゐて、冷靜を保つて居る人でも、皆一緖にして連れて行くのである。

吾々は幾つかの森や河を越へて走つた。眼界の分らぬやうな牧場を越へた。遠い靑さの中に消えて行く小山を越へた。丁度收獲期に當つてゐる計り知られぬ程富んでゐる地方を越えて行つた。それ等の總ての上に、吾等の故鄕の太陽は輝いでゐる。

私は喜んで私の兩手を擴げる事にしよう。さうだ、吾々の故國は立派で大きい。そして其ために男の血を注ぐに足るべき價値がある。

六　靑春の如く

吾々は本道を離れて、切株の野原を進んだ。こゝには昨日戰鬪があつたので、野には死体が撒きちらされてゐる。負傷兵は收容せられた。けれど

もまだ戰死者を其倒れた地に葬る暇が無いのである。

吾々の見た最初の死人は吾々を啞にした。初めは吾々はどういふわけか、それを本統と認める事が出來なかつた――生命の無い新らしい制服がそこに投げ出してある――その横はつてゐる樣子を見て、果して本統に死んでゐるか否かを信ずる事が出來なかつた。それは舌に刺のさゝつたやうな感じを與へた。恰も吾々が演習にあつて、日射病に罹つた戰友が濠の中に横はつてゐるやうに思はれた。亂暴な兵隊らしい戯言か、快活な氣力をつける叫び聲が、彼の萎えてゐる足を起たしむるに必要であつた。

「ハロー！頭をあげろ。首を眞直にするんだ。」

併し言葉は吾々の咽喉で氷つて了つた。なぜといふに、氷のやうな息が死人の方から吾々の方へ送られ、冷い手が吾々の恐れに撲たれた心を摑んだからである。

さうだ、死人だ！吾々は今や全くそれを知つた。それは見えるが如くである。吾々は顏をそむけた。そして身顫ひをした。

併し死人は次第に多くなつた。

それが爲に吾々は彼等に馴れるに至つた。

不思議だ！私が之等の默つてゐる顏を見てゐると、それは吾々を笑つてゐるやうに見えた。彼等の傷口は、とりとめもなく吾々を見てゐる口のやうに見えた。彼等は恰も吾々と何の關係も無いやうである。之等の物は皆非常に遠い、又全く無關係の物のやうに私を打つた。之等の總ての死者は、恰も硝子の箱の中に横つてゐる死体のやうである。私は丁度解剖學敎室にでもあつて、冷靜な好奇の眼を持つて、科學上の實驗を見つめてゐるやうである。

折々全然負傷してゐないやうに見えるのがある。彈丸は制服の何處かを通過して、身体の軟らかい部分を奇麗に貫通して了つたのである。

彼等は奇怪な形をして、死んで、硬くなつてゐる。恰も死といふものが、其形をこゝに示さうと試みたやうである。そこには常に循環してゐる『死』の確かな企てがある。手を投げ出して――指は草を搔きむしつて――前のめりになつて仆れてゐる――仰向けになつてゐるひとりの男は、手を

堅く其腹に押しあてゝゐる。恰も傷口の出血を止めんとしてゐるやうである。

田舍にゐた頃、私は或る時羊を殺すのを見た事がある。獸はそこに橫はつて、屠獸手のくるのを待つてゐる。小さなナイフが獸の氣管と、頸部の動脈を切り離すと、其頸から溫い血がほとばしり出る。私は大きな眼より外には何も見る事が出來なかつた。恐ろしさうに見開いてゐるその眼は、まア何といふ大きさになつたらう。が、どう〳〵それも鈍いガラスのやうに變つて了つた。

こゝに橫はつてゐる總ての身体は、恰も空に向つて鳴いてゐるやうである。皆かういふガラスのやうな眼を持つてゐる。彼等は屠獸所に投げ出だされたやうに橫はつてゐる。さうだ、擊たれたから仆れて死んで了ふので、之れに就ては別に騷ぎ立てる事はないのだ！併し胸を射貫かれたり、腹を打ち貫れたりすれば、その傷のために數時間熱に燃え、その痛む身体を濕つた草の上で冷やし、そして無情な青い空を見あげなければならないのである。何となれば、呪はれたる眼は硝子玉のやうになるにはまだ時間があるからである——

私は彼等から眼を轉じた。そして之等のあざ笑ふやうな、奇怪な、『死』の塑像を見過ごさうと努めた。

此時私は又ずつと別な事を想つてゐた。私は私の家の小さな書齋に坐つてゐる。私の手には氣持のよい珈琲茶碗がある。本箱は輝いでゐる。私の好きな本は私を招いてゐる。そして私の前には書物中の書物なる『フアウスト』が開かれてゐる。私はそれを讀む。私は仕事の後に、私の熱望してゐる血の中へ忍び込んでゐる、驚ろくべきくつろぎを感ずるのである。

扉が開かれる。小さな娘と、漸く歩く事を覺えたばかりの息子とも、戶口に其鼻を突き出す。

「とうちやん、入つてもいゝ？」

私はうなずく。と、彼等は其小さい手を擴げて私の方へ突進する。

「とうちやん！」

彼等はもう私の膝に這ひ上らうとしてゐる。私は彼等を乘せてやる——「さアお馬に乘つて戰爭に行くんだ。」

併しふたりは其軟らかい手を私の頸に卷き付け

て離さない。そこで私はとう〳〵二人を床の上におろして、「今度は母ちやんとこへおいで——」

それから今度は——

新らしい光景がある。どれ程私ははつきりとそれを見た事だらう。吾々は日曜の午後に郊外へ出かけて行つた。手さげ袋や小さな鞄などを持つて行つた。私は緑の野原の輝いで美くしいのを見た。又私は二人の子供の輝いで美くしいのを見た。子供達は草の中を躍ね廻つたり、蝶々のあとを追ひ廻したりする。それから私を見て笑つたり、私が投げてやつたボールのあとを追ひかけて、嬉しさに叫んだりする。空は吾々の上に安息日の青さをひろげてゐる。恰もあらゆる物に終りなどいふ事は來ないやうにしつかりと見える。ドラは落ちついた眼をして私に微笑むでゐる。

やがて私は出發點に歸つて來た——私は背嚢が背中に痛いのを感ずる——私は私の銃のある事を感ずる——私は再び私の足許に死人を見る——

あゝ！これはまア何といふ事だらう？これ等の二つの世界がこれ程恐ろしく接近してゐるといふのはどうした事だらう？……

が、吾々は之等の初めての死人の秋の收穫の中を通つて行く。誰も一語を發しない。誰も戲言一つ言はない。死骸はどれもこれも奇怪な形をして傷ついてゐる。かゝる死骸に出あつた時には、誰も彼もひそかに眼をそらす。

何が彼等の頭を通過するのだらう？

勞働者、商人、職工、農夫、大部分はかういふ人達である。彼等は未だ曾て自ら煙硝の匂をかいだ事もなければ、砲火の下をくゞつた事もない。思ふに、彼等が突然啞になつたのはかういふわけからであらう。

その時突然私の横から何か呟く聲がきこえた。それは丁度沈默の孔に彈ねかへつたやうな聲である。

「こゝらにや人間がまるで塵塚のやうにぶつ倒れてらア。」

それは私の横の田舍者であつた。かう言つて彼はまた默り返つて了つた。私は彼等の內氣な眼の中に或る物を讀み得たやうに思つた。それは恰も彼等の鈍い頭の中が、突然日光のやうに明るくなつたもののやうであつた。

彼等はすべて別の世界から連れてこられたのである。その別の世界では、生命は吾々に接吻し、且つ吾々の身体を抱くやうにめぐつてゐると考へてゐた。誰も自分を人間であると思つてゐた。生命も愛も最早考へらるべきではない。肉も血も最早考へらるべきではない。今ではたゞ凝結した血と死骸とが考へらるべきである。赤裸体な人間の生命が危險であるといふやうな時には、吾々はそれを考へたゞけでもどれ程震へた事だらう。哀れな麻痺症の老婆が懇願する時には、それを救ひ出さんが爲に、吾々は燃えてゐる家の中へでも飛び込むのである。又餓えた乞食の子が水に溺れてゐる時には、吾々は冬の河へでも飛び込むのである。吾々は吾々の見てゐる處で、こつそりと『生命』を掃き去るやうに人間を苦しめてはならないのである。吾々は自殺せんとする者を、其最後の嘆きに於てとゞめ、無理に彼等を生きかへらせる。有難い事には吾々は半ば腐つた身体をも新らしい身体でもつて治療する。丸薬や、興奮剤や。其他の薬品や。それから本藥學者や、大學教授や、外科醫や、或は灸點だとか、切斷だとか、電氣治療だとか、之等のものによつて吾々は消えようとする生命をあふぎたてる。そして沈みゆく焔を、酸素や、ラジウムや、其他の材料で養ふのである。世の中に『生命』よりも、もつと偉大な、もつと神聖な物は無い『生命』は吾々にとつては總てゞある。『生命』は吾々の地上に於ける最も貴い所有物である。

こゝに、其最も貴い所有物が横はつてゐる――こゝに、それが不經濟に使ひ減らされてある――道ばたの塵のやうに投げ出されてある――そして吾々は其上を、塵か石の上を越えて行くやうに、越えて進んで行くのである。

寄贈書籍

兄と弟（モウパサン作 水上齊譯）金一圓廿錢　植竹書院

サアニン（アルツイバセフ作 武林無想庵譯）金九十錢　植竹書院

一讀を乞ふ　若宮卯之助著　金五十五錢　ナショナル社

次號細評

社告

本誌一月號は、印刷所の不注意の爲めに、中に印刷の非常に不鮮明なのや、甚だしい組み違へや、落丁の分が生じました。で、直接間接の購讀者諸君の御手許に、そういふ不完全な分が尠からず往つて居る事と存じます。印刷所の責任であるとは申しながら、誠に申譯の無い事でございます。それ故、若しそういふ分の參りました處へは、更に完全な雜誌を御送りいたしますから、どうかお申し越し下さいまし。但しそれには、御手數で甚だ恐縮でございますが、その惡い分を御返送を願ひたう存じます。さすれば、すぐさま郵送いたしますから。

もう一つ、お斷はりして置かなければならないのは、二月號の發行が定日よりも一日二日遲れやうかと思ふ事でございます。暮れや正月は、何かと急がしかつたものですから、つい手が廻り兼れて、色々不都合な故障を生じましたが、然し、來月からは必ずこういふ事の無いやうに、注意いたします。

■寄贈雜誌■

創造　馬上大學　第三帝國　生活と藝術
青鞜　帝國文學　新公論　實業之世界
新潮　新佛教　自畫像　人生と表現
エゴ　モザイク　東洋哲學　ダイヤモンド
假面　新世紀　新眞婦人　ナショナル
創作　現代詩文　關西藝術　フースフー
白樺　婦人評論　英語青年　内外教育評論
銀聲　文章世界　公友新報　東京魁新聞
凍野　イーオン　村落通信　鑛業及鑛夫
獨立評論　支那と日本　自由評論
日本婦女新聞　名古屋經濟雜誌

■一月號目次■

■定價一册金十錢、半年分前金五十五錢、一年分前金一圓。但し外國は別に一册金二錢宛の郵稅を要す。
■郵券代用は五厘切手に限る。但し一割增の事。
■廣告料特別一頁十五圓、普通十圓。
■本社振替貯金番號東京一七一六三。

大正三年一月三十日印刷納本
大正三年二月一日發行

府下大久保百人町三五二
近代思想社内
編輯兼發行人　大杉榮

府下大久保百人町三五二
印刷人　荒畑勝三

京橋區銀座四丁目一番地
印刷所　福音印刷合資會社東京支店

大賣捌所　東京堂、上田屋、東海堂、北隆館

第一卷
第二號

エゴ

二月一日發行
定價金貳拾五錢

第二月號

發行所 東京市小石川區西江戸川町九 日本洋畫協會
編輯所 東京市牛込區新小川町三ノ三一千家方 エゴ社

權威ある純女流文藝雜誌

第四巻第二號

青鞜

毎月一日發行

二月號

發賣所　青鞜社
東京府下巣鴨町
振替東二一一六

特價金廿五錢
郵税金一錢五厘

發行所　尚文堂
東京市神田區
南神保町十六

定價三十錢

假面

郵税金二錢

第三卷 二月號 第二號

挿畫

■ニグロの女（キセレーワ）
■シエエラザド（リース）
■最近のクープリン
■洗禮（ペツテルソン）

發行所 東京市外大久保百三十一 假面社

發賣元 東京神田錦町一丁目十九 振替東京一二三番 中興館

生活と藝術

二月號

■一青年の手記……荒川義英

作者は今單に無名の一青年に過ぎない。しかしこの一篇は最近讀ちの連中の間に一讀されて、いろいろの意味から問題になつたものである。堺利彦氏などは、さきに『昨年中に於ける文壇の收穫』として、時事新報紙上にこの一篇を推薦した。其觀察の獨創的なると其文字の新味あるとに感心したと公言した。實際荒川君は堺氏の言ふ通り、一面から見ると一個の不良少年に過ぎないが、一面から見ると一個有爲の才人である。この百頁に足らぬ雜誌が大部分を擧げて之を發表するのは決して物ずきではない。(土岐哀果)

■地上(歌)……土岐哀果 ■新しき歌……青年百餘家

定價一冊十八錢・郵税一錢

出版通信

■年四回刊行の「未來」は豐富な實質ある內容を以て第一輯が市に送り出された。この冊子に筆を執る人達は藝術を最も正しき意味に生かさうとする抱負をもつて集つてゐる。菊判三百五十頁、定價六拾錢、送費六錢。第二集は三月十五日發行。

■三月一日から新らしい月刊女流藝術雜誌「番紅花」が高級な婦人達のために、その机上に薦められる。

■出版目錄は希望のお方に御申越次第御頒ちする。

發行所 東京市日本橋區檜物町(振替東京五六一四一番) 東雲堂書店

近代思想

第二巻第五號

大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正三年一月三十日印刷納本
大正三年二月一日發行

二月號

金十錢



大正三年一月三十日印刷納本（大正三年二月一日發行）

二月號

金十錢

近代思想 第二巻第五號
大正元年十月一日第三種郵便物認可毎月一回一日發行
大正三年一月三十日印刷納本（大正三年二月一日發行）
二月號 金十錢

